

第1回 ICTを活用した自立活動の効果的な指導の在り方検討会議 会議録

令和3年6月28日(月)14:00～16:00

のじぎく会館ふれあいルーム(オンライン参加有り)

1 開 会

(1) 開会あいさつ

(2) 座長選出

2 報告事項

教育委員会事務局特別支援教育課から県のICTへの取組及び本事業説明

3 協議事項

テーマ「ICTを活用した自立活動の授業の取組と今後の方向性」

①昨年度から児童生徒へのタブレットの購入が本格的に導入されているが、学校現場ではどのような状況か。

〈研究指定校〉A校では数年前から高等部の全員が、iPad1人1台を就学奨励費で購入し、使用している。ただ、小学部、中学部はiPad1人1台を使える状況に至っていない。今後、どのような活用ができるのか検討を始めた段階である。

〈研究指定校〉B校では、今年度から就学奨励費を活用し、高等部の生徒にiPad1人1台購入した。平成23年、24年度に福祉のまちづくり研究所とiPadを活用した授業の研究を行い、少し古いiPadを活用しながらクラスに1台活用していた状況がある。今年度は高等部の生徒が1人1台購入しており、小中高各クラスに1台は確実に利用できるようにはなっている。

〈委員〉GIGAスクール構想が入って、今まで使っていたタブレットが使えない状況もあると聞いている。

〈教育委員会〉県の施策としては、特別支援学校においてこれまでもiPadを導入してきた。今後もiPadを1人1台導入していく。これまでもそしてこれからも変わらない状況にある。県立高等学校の方では、若干まだ仕様が固まらない状況がある。

②今後の研究の方向性について

〈委員〉この研究において、子どもたちのモチベーションや学ぶ意欲をどう支援できるかが重要である。不登校の事例では、生徒が学校に行くことができた。視線入力装置の事例では、視線入力支援装置をうまく使うことはできなかったが、ジェリービーンズスイッチ、棒スイッチをうまく取り入れ、子どもたちのモチベーションや学びを引き出していったところはずごくよかった。

また、不登校支援の目的は、学校に来させることではない。不登校だけ学びたいとか、友達とは話したいとか、特定の友達や先生と話したいというニーズがあるはずである。そのニーズを実現し、学びを広げていくことがすごく大事である。ICTを使って子どもの学校に行きたいというニーズをどう実現していくかが重要になる。視線入力支援装置の事例で感じたのは、認知の高い生徒も視線入力装置を使って可能性を探ることもよいのではないか。

〈委員〉ICTを活用して子どもが将来的に社会的な自立を果たしていくことを考えた時に、ICTの活用方法には子どもたち一人一人に合わせて夢があると感じた。ICTを使う目的として自立に向けた力を育てること、使い方としては、教育環境を個別に合わせる方法がある。例えば、意志表示のための視線入力装置、不登校の児童生徒にはオンライン学習、難聴の場合、音声認識ソフトなど学習環境を整えることがあげられる。

〈委員〉我が子の通う学校でICTの活用を見学した。先生方が授業でICTをととても工夫し、使われていた。検討会議でほかの学校の様子を知り、それぞれの生徒に応じた形でのICTの活用の仕方を学ぶことができた。今後、ICTの活用の仕方を先生任せにするのではなく、保護者自身も学んでいく必要があると考える。

〈委員〉今は保護者もスマートフォンを使っている。また、学校もタブレットを中心に使えるようになったので、保護者からもいろいろな意見を聞かせていただいたり、ICTを体験していただいたりして話が膨らめばと考える。

〈委員〉特に、不登校の子どもへのICT活用は地域の小中学校等の関心も高く、その子に合わせて、ねらいをもって活用していく必要がある。ICTを使うことが目的にならないよう、個別の指導計画に基づいて活用することが大切だと考える。視線入力装置を使うことで子どもはどんな考えなのだろうと、教師の主観だけでなく、教師がさらにその子どもの思いを考えていくことができる点でもとても有効であるとわかった。

また、小中学校、義務教育学校の授業の様子を見ている中で、現時点ではまずは、ICTを使ってみる段階にあると考える。このような検討会議での報告をいろんな機会に伝えていきたい。

〈委員〉以前、特別支援学級の先生にタブレットの講習会を行った際、学校で導入された機器に先生の思いでアプリを入れることができなかった。管理しないといけない部分と一方で、先生がある程度、自由にアプリを入れることができるように考えていく必要がある。

〈教育委員会〉昨年、GIGAスクール構想で、A校の児童も全員端末を使用し、クロームブックを導入している。A校の知的障害特別支援学級ではソーシャルスキルを身につけるために支援サイトの画像や、アプリなどを利用した学習に取り組んでいる。現段階では、遠隔システムを利用した授業、不登校の児童生徒へのICTの効果的な使用については、まだまだこれからという段階である。

〈委員〉C校では、電子黒板の活用について先生が色々、試みている状況である。電子黒板の導入前は、どうやって使うのかと不安に感じている先生も、実際に導入をするとすぐにそのよさに目を向けて活用している。

ICT機器を使用する上でどのツールをうまく活用して、ねらいをどのようなところに持っていくのかを明確にしないといけない。また、ボタンやスイッチを子ども自身で操作するなどICT機器は子どもが主体的に授業に関わることができる一つのアイテムだと感じた。ICTは子どもがこれまでできなかったことあるいは、子どもの負担を減らすこともできるのではないかと考える。

特別支援教育における遠隔の指導では、病弱教室で早く活用ができることも今後、課題ではないかと考える。C校では、昨年、ビデオを作るのにあたり、著作権や映像に関する問題点について話し合い、ガイドラインの作成を行った。

〈委員〉今後、このICTの機器を活用する上で、教師のICT活用に対する力もつけなければならない。子どもたちが学校を卒業し、社会に出た時にこのICTの活用がどのようにつながっていくのか、学校と社会のICT化の進度も気になる。

〈研究指定校〉A校では、電子黒板の導入や使用はとても早かった。授業への活用もスムーズだった。しかし、自立活動では、課題がある。自立活動の授業のどの場面でICT機器を使うかまた、ツールとしてどうやって上手に使っていくのかというようなことをしっかりと捉えきれていないところがある。この研究活動を通してその点をしっかり取組んでいきたい。インクルデータベースのように事例がたくさん蓄積されるような一年になればと考える。

〈研究指定校〉昨年の12月からB校では、今年度に向けてICT教育の推進に取り組んできた。推進にあたり、全職員に共通化、共有化するように進めてきたが、まだまだ職員間に力量の差がある。意欲的に取組を進めている先生がいる一方で50代、60代の先生の中でICTの活用は難しいという意見がある。研修を実施し、個々に合わせた道具としてICTが使えるようになっていければと考える。本校にもクラスに入れない生徒が中学部や高等部におり、ウェブを利用した学習活動に取り組んでいる。

③総括

- 25年ほど前、特別支援学校の高等部で教えていた時、知的障害のある子どももワープロを含めて結構早くからキーボードを打つことができた。面と向かったのコミュニケーションや文章の組み立て方が上手くできないことはあるが、はるかに特別支援学校

の子の入力の方が早かった。

その当時、「知的障害のある子にコンピューター使わせてどうするのか。」とよく言われた。この子ども達の表現方法は、言語のコミュニケーションは苦手かもしれないが、他の手段で表現することができるかと伝えてきたが、なかなか理解してもらえないことがあった。

映画『自閉症の僕が飛び跳ねる理由』という主人公は特別支援学校の卒業生で自閉症の特性が顕著で会話でのコミュニケーションが難しい。その主人公がワープロを覚えたことにより自分がどうしてここでイライラしているのかや同じ行動をすることによって自分の気持ちをコントロールしていることを説明することができた。

このことからわかるように私たちは、表出の手段をしっかりと子どもたちに教えるということがどれだけ重要なことを改めて考えなければならない。ICTの活用を考える際にまず、この辺をスタートに考えていきたい。ICTをほんの少し工夫しながら使っていくだけでも、かなり子どもたちが変わっていく。

知的障害を伴う子どもの自立活動を考えていく場合、知的機能にメインを置いた取組を進めていくのかもしくは、適応機能にメインを置いた取組でしていくのか、それともそれに関連するような例えば不登校などをほかのことにメインを置いていくのか、この3つに柱を絞っていく必要がある。

ICFの考え方では、知的障害をできるだけ知的機能というよりも適応機能の障害として見ていく方向性がある。要するに、一番困っているのは知的な機能が重度だから、困っているというよりもそれに伴う様々な行動においてなかなかうまく適応できないことだとされている。この適応機能による障害に対してどのような形でICTを活用し、カバーしていくことができるか自立活動の視点から考えていきたい。

自立活動に関して、知的障害教育では自立活動を合わせた指導で行っているが、自立活動の時間の指導をしていない学校が結構、多い。自立活動の時間の指導を置くことは、自立活動が一本芯の通ったものになる。自立活動の中のどこにこのICTを活用していくのかを皆で一緒に考えていきたい。

この事業としては、ICTをメインに据えながら本県の特別支援学校における自立活動の指導の現状と課題についてや外部専門家の活用、教員の専門性についてなど、自立活動をもう少しくましく活用し、広げていき、その中でICTを使えるところについてはしっかりと使っていこうという方向性がある。

子どもたちにとってICTをどのように活用したらいいのかを考え、「この時にICTを活用したらきっと役に立つな」や「面白いだろうな」と子どもたちが興味関心を持てるようなICTの活用を考えていければと願う。